

---

# 見習い勇者? (クロス)

零堵

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

見習い勇者？（クロス）

### 【Zマーク】

Z7958Z

### 【作者名】

零堵

### 【あらすじ】

七か月前に書いた「見習い勇者」のリニューアル版です。

前と違つて、文章校正が違っています。

勇者と決めつけられたリョウは、仲間を集め、嫌々しながらも魔王退治に行く事にしたのでした・・・

## ～第一話～勇者誕生～～（前書き）

この物語は、不定期連載としたいと思います～

## ～第一話～勇者誕生～

世界は、暗黒に包まれようとしていました。何故なら魔王が復活したからである。

これは魔王倒す為に冒険をする事になった者達の物語である。

ここには、どこかの小さな村、この村は豊かでもなく寂しい感じのする場所であったが、人々は皆、暖かくのどかに暮らしていたのである。

「もうこんな特訓嫌だ～！」

そんな中、余りにも悲痛な叫びが聞こえた。叫んだ者は、父親らしい人に文句を言つていて。

「何を言つーこんな特訓でも足りないと言つのにー文句があるのか？」勇者よー！」

「だから俺は、勇者になりたくないんだつてーちゃんと名前があるんだから名前で呼んでくれよ！親父！」

そう勇者と呼ばれた、人物は言つた。ちなみに彼の名前は、リョウと言つた。

「しかしだな、リョウよーお前はこの父、ザインの息子なのだー、祖父が魔王を倒した勇者だつたのだ、時が過ぎ、私も祖父の意思を継ぎ勇者にならうとした・・・だが、肝心の魔王がいなかつたのだ、だから仕方がなく結婚をして子孫に勇者を継がせようと思ったのだ、そして時は来た！魔王復活の知らせだーだからお前が勇者なのだー！」そう熱く語るのは、勇者の父親、ザインであった。ザインはこの村で建設業を営みながら、

趣味で色々な場所を歩くトレジャーハンターでもあった。

「だからって俺がやる事はないだろ？ー？だって俺に何が出来るんだよー！」

そう勇者は言つと、ザインはいきなり勇者をひっぱたく。

「馬鹿者～！何の為にお前に格闘術、武術、暗殺術を教えたと思つている～！」

「それは、勝手に親父が学ばせたんだろ～が～！」

「おつやる氣か！父に情けは無用だ、存分に来い！」

「ひおおおお～！」

勇者は、ザインが投げてきた竹刀を取ると、ザインに向かつて突撃した。

「まだまだ甘いわ！勇者の鉄則、技名は必ず大声で言つのだ！、こんな風に！はあ！流星斬！」

ザインは、竹刀を垂直に構えて、勇者に向かつて一気に降り下ろした。

「いた～！」

勇者は、避けよ～としたけど、ザインの剣技が余りにも早くて、避けきれなくて頭に直撃したのであつた。

「まだまだ甘いぞ！勇者よ！それじゃすぐやられin～！」

「だつたらどうすれば良いんだよ～！」

「もつと修行するのだ勇者よ！それで魔王を倒すのだ！」

「だから、嫌だつて言つてるだろ～！！」

「勇者よ、そんな事言つてはならん～おつともう～」んな時間か、私は仕事に行く、しつかり鍛えているのだぞ？」

ザインは、そう言つた後、勇者の元から離れて行つたのであつた。

「誰が鍛えるかよ、俺はあそこに行つてやる」

勇者は、そう言つと村を出たのであつた。

「今日も疲れたからあそこで寝るか～」

勇者が向かつた先は、森の中、勇者は森の中の秘密の場所と、勇者が勝手に名付けた場所に向かう事に決めたようである。

「ふう、あんな特訓ばっかりしていたら疲れるつての、ん？」

勇者は何か見つけたようである。

「誰か倒れてる！」

勇者は、秘密の場所に倒れているのを見つけた。

「おい、しつかりしろ！それにしても・・・」

勇者は、倒れている者の姿に驚いた。何故なら勇者と同一年ぐらいに見える少女であり、服装は紫の三角状の帽子をかぶり、杖を装備していた。俗に言う魔道士と言つ格好なのだが、勇者は知らなかつた。

「凄い傷だらけだ・・・何かにやられたのかな？」

「う・・・ここは・・・」

「あつ気がついたみたいだな、大丈夫か？」

「大丈夫じゃないから倒れていたんです、私はある人を探してこんな場所まできました・・・」

「そうか、大変だつたんだな、傷の手当てが必要だろ？とりあえずうちで手当てするか？」

「色々ありがとうござります、でわそつさせで貰いますね、あつそく言えば貴方の名前、まだ聞いてませんでした」

「俺か？俺はリョウと言つんだ、君は？」

「私は、マイと言います、よろしくです」

マイと名乗つた少女は、ふらふらで今にも倒れそつた。

「こうしちゃいられないな、早速、家に戻るか」

勇者は、傷が深いマイをおぶつて勇者の家に運ぶ事にしたのであつた。

## 勇者の家

「あら、勇者、おかえりなさい、つて、その子ビーッしたのー？」

「こいつは森の中で・・・」

勇者が、そう言つ前に、勇者の母親はこつ言つたのであつた。

「まさか、勇者、その子、貰つて来ちゃつたのね！そつなのね！あつなんて事・・・私の自慢の息子がこんな事を・・・」

「違うつて、この子が森で倒れてたから傷が酷いから手当てに連れてきただけだつて！」

勇者が、そう言うと、母親は納得したように頷く。マイは意識を失つていたのであった。

「これは大変ね、早速応急処置だわ」

勇者の母親は、マイをベッドに寝かせ看病をした。勇者も母親の手伝いをしたのであった。

そしてその看病は丸一日使つたのである。

次の日

「う・・・」  
「？」

マイの傷はほとんど完治していた。

「気がついたみたいだな」

「あつはい、ここは？」

「ここは、俺ん家だ、マイは意識失つて俺が運んだんだぞ？」

「どうもありがとうござります、えっと・・・リョウさん？」

「リョウで良いよ、俺もマイつて言つてるし」

「あつじやあそぶ呼ぶ事にします」

「あら、気がついた見たいね？」

勇者とマイが話していると、勇者の母親が話しかけてきたのであった。

「どうも、傷の手当てしてくれてありがとうございました」

「あら、いいのよ？それより勇者？ザインが修行するから来いと言つてるわよ、さつさと行きなさい？」

「解つたよ、じゃあ行つてくるよ」

勇者は、武器を構えると外に飛び出したのであった。

「あの！今、勇者つて言いましたよね？」

「え、ええ、言つたわよ？それがどうかしたの？」

「実は・・・私は探している人がいたんですね、まずなんで探して  
いたかお話をします」

マイは、これまでの事を勇者の母親、ミカリに言うのであった。

「実は、私の住んでた町は、魔王の攻撃によつて滅ぼされたんですね、

それで私は過去に魔王を倒した者、すなわち勇者を探していたんです

「そうだったの、大変だったのね？」

「ええ、大変でした、あの聞きたいんですけど、本当に勇者なんですか？リョウは？」

「本当はお父様が勇者だったんだけど、高齢だからね、息子に継がせたの、だから勇者に間違いないわよ」

「そうですか！探したかいがありました、あつ所でザインって誰ですか？」

「勇者の父親、つまり私の夫よ、今、勇者に修行させてるから、帰つて来たら事情を話したら？きっと力になってくれると思うわよ？」

「はい、解りました、そうします」

マイは、勇者が戻つて来るのを待つことにしたのであった。

（夜）

「ただいま」

勇者は、日が暮れてから帰つて來たのであつた。後ろにはザインがいた。

「おかえりなさいませ、勇者様」

マイは、そう言つ。勇者は驚いたのであつた。

「え？ 勇者様つて？ 確かに俺は勇者つて呼ばれるけど？」

勇者がそう言つと、マイは安心した顔で、勇者に話すのであつた。

「実は、私のいた国は、魔王によつて滅ぼされたんですね、私は敵討ちに修行して、旅を続けていました、そして噂で聞いた魔王を一度倒した者、勇者と呼ばれた人を探してたんですね」

マイが、そう言つと、ザインがこう言つた。

「そうであったか、良し勇者よ、この子の手助けをしてやれ！」

「ええ！ 手助けって！ 俺は嫌だよ！」

勇者は、嫌がつた。それを聞いたマイは、泣きそうな顔をしてこう

言った。

「駄目ですか・・・？」

「う・・・」

勇者は、嫌そうにしてたが、この子には弱かつた。

「ほら・勇者? こんなかわいい子の願いを断る気なの?」

ミカリは、そう言つ。勇者は観念したみたいで「解つた、手伝つよ」と言つた。

それを聞いたマイは、嬉しくて勇者に抱きつく

「あ、ありがと『やこ』ます~!」

「解つたから、抱きつくなはやめてよ、恥ずかしいし」

「あつすいません、ちょっと嬉しかつたもので」

その光景を見ていたミカリは、この言つた。

「あらあら若いっていいわね~」

「そうだな、良し勇者よ、お前に渡す物がある」

ザインは、そう言つと、奥の部屋から一本の剣を持ってきたのであった。

「親父、この剣は?」

勇者がそう聞くとザインは、剣を渡すといつたのであった。

「この剣はな? 先代の勇者が使つていた由緒正しき剣だ、これをお前に託す、まあ勇者よ今こそ旅立つのだ!」

「え? 旅立つて・・・それ断つちゃ駄目?」

勇者が、そう言つと、ザインはこう言つたのであった

「当たり前だ! お前は勇者なのだから、魔王を倒しに行つて!」

「そうです! 勇者様、私と一緒に行きましょう!」

マイも、ザインと同じ様な事を言つ。勇者は「解つた、行くよ・・・

」と、OKしたのである

こうして、勇者とマイは、魔王を倒す為に旅立つ事になつたのであった・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7958z/>

---

見習い勇者? (クロス)

2011年12月25日16時45分発行